

【ねがいましては】

第98号

平成9年9月25日

共和珠算学習塾

「子どもたちから」

最近、黒柳徹子さん著の「トットちゃんとトットちゃんたち」という本を手にししました。ユニセフの親善大使として世界各国を歩かれた13年間の思い出を綴られています。私たち日本人が普段感じている日本の子どもたちとは、あまりにもかけ離れた姿が展開します。命の危機が少ないということが、いかに幸せなことなのか。先日亡くなられたマザーテレサさんは、貧しい人々から受けた愛は計り知れないと仰っていたそうです。黒柳さんはその恵まれない子どもたちから多くの愛を、あたたかい涙をいただきました。そして私もこの本を通じて子どもたちのこころや、人々の弱さ、愚かさを拝見させていただきました。

NHK教育テレビで7～9月の間、灰谷健次郎さんの番組が放映されました。灰谷さんは子どもたちから実に多くのことを学んだとおっしゃっています。子どもたちの発する「人」らしさを強調されていました。

ますます豊かさを増した私たちの国、日本。最近特に心の痛む子ども関連の事件が多発しています。お隣韓国では、今、日本以上の受験戦争が繰り広げられているそうです。成績至上主義の中で子どもたちは苦しみ続けています。その風潮の盛り上がりと並行して、いじめや暴力が増加しているそうです。反対にアフリカの某国では、本を一冊盗んだだけで少年院へ送られるのだそうです。

世界中の子どもたちが、常に社会的圧力をかけられ苦しんでいるような気がいたします。

この本の一部をご紹介します。

◇「ボスニア・ヘルツェゴビナの戦争は子どもをターゲットにしていた」

私が心の底から「許せない」と思ったのは、子どもが大好きなぬいぐるみの中に爆弾をしかけたことだった。子どもはぬいぐるみが大好き。私が小学生だったとき、空襲で防空壕に逃げるとき、真っ先に抱いて走ったのは「クマのぬいぐるみ」だった。

疎開するとき、私はそのクマのぬいぐるみを持っていこうとした。兵隊に行ってしまった父の贈り物だったぬいぐるみ。私のお友だちだったぬいぐるみ。でも母は、混んだ汽車で小さい弟や妹がいるんだし荷物は持てないから置いていかなくちゃダメなの、といった。

私は本当に悲しかった。私は家を出るとき父の椅子にそのグレーのクマをのせた。疎開先で家が焼けたと聞いたとき真っ先に頭に浮かんだのは、クマのぬいぐるみが火に包まれている光景だった。

だから、子どもがぬいぐるみをどんなに大切に思うかわかっている。

ボスニアで戦闘が始まり屋根が吹き飛び人々は逃げ惑った。それでも子どもは母親に守られて助かった。戦闘が静まり、とにかく家に戻るようになった。自分の部屋に入ると、なつかしいぬいぐるみがあつた。(ごめんなさいね。つれていかなくて。でも、まっけてくれたのね) たぶんその子は、こんなふうに思ってぬいぐるみに駆け寄ってぬいぐるみを抱きしめた。そのとき仕掛けられた爆弾が破裂して・・・その子は死んだ。

しばらく家を空けている間に、敵はその家に入り込み、ぬいぐるみの中に爆弾をつめこんだ。抱けば爆発するように・・・。子どものこころをここまで知り尽くし殺そうとした「戦争」。ぬいぐるみを抱きしめて死にながら、その子は何を思っただろう。(私のお友だちが私を待っていてくれたはずの友だちが、私を殺すなんて・・・) 私はこころから戦争を憎んだ。